

# ラフカディオ・ハーン——晩年の結実（二）

牧 野 陽 子

## 三 微粒子の世界像

### ● 虫の文学

一九〇二（明治三五）年三月、ハーン一家は西大久保の旧板倉子爵邸を購入して引っ越す。

瘤寺に若い僧が新しく来てから次々と樹木が切り倒され、墓が退けられて貸家が建ち、すっかり雰囲気が変わってしまったために転居せざるをえなかったのである。以前、セツが借家ではなく自分の家を持ちたいと言うと、ハーンはいつも隠岐の島か出雲がよいと答えていた。だが、西大久保の今度の家がハーンにとって終の住処となる。

静かな町はずれの七百坪の敷地、庭には様々な樹木、草花、竹藪が生い茂っていた。ハーンは改装や引っ越しその他、「私、時持たないです、ママさんの好きしまししょう、ママさん、なんぼ上手します」と言ってすべてセツに任せきりにした。だがその年の五月、マルティニーク島のサン・ピエールの町がペレー山の大爆発のために住

民もろとも全滅したことを知った時だけは、熱帯をしのいでハーン自身庭に芭蕉と竜舌蘭を植えている。

ハーンが亡くなった時、長男の一雄はまだ十歳の子供だったが父のことをよく記憶しており、晩年の面影を後に『父へ八雲』を憶ふ（一九三二）『父小泉八雲』（一九五〇）に記した。その一雄の脳裏には、夏、庭へ出では虫と遊んで時を過ごすハーンの姿が焼きついている。

「ほとんど終日蟻の穴や蟻の巢の傍らの地面に新聞紙を敷いてその上に坐って彼らの生活状態を面白がって観察していました。樹下に佇んで蟬の声を聴いたり、夜はかつて虫壳から買って庭へ放してやった鈴虫、松虫、きりぎりす、馬追、邯鄲、草雲雀などの虫の音に耳をそばだてました。」（『父へ八雲』を憶う）

晩年のハーンの創作の二本の柱は、前述したように怪談と瞑想的随想文だが、その間に散見されるのが、日本の虫の詩歌の研究、虫をめぐる随筆や物語である。『異国情緒』（一八九八年）から最後の『怪談』まで、「虫の演奏家」「蛙」「蚕」「蟬」「蜻蛉」「蠅の話」「螢」「草雲雀」「安芸之助の夢」「蝶」「蚊」「蟻」など、虫に関わる短い章が怪談の再話作品や叙情的な回想文の間に必ず姿を見せている。

ハーンは松江時代も庭で童心に帰って虫を観察し、様々な蟬の鳴き声に興味を覚えていた。しかし、晩年は哀愁ただよう秋の虫の音の方により心動かされたようである。そしてその関心も、虫の生態より、むしろ虫というものに自分を含めて人間がいかなる思いをこめるかという点にあった。こうした小品では江戸以来の虫売りの風俗、その歴史、虫の鳴き声の種類と値段が記され、虫の市や養蚕も紹介されている。だが最後は、その主題の和歌や俳句を多数挙げて英訳し、その詩を通して日本人の昔ながらの想像力の襞の内に分け入ろうとする。

ハーンは大学の講義で西洋文学を語り、英詩を講読解釈していた。従ってこれら虫を歌った日本文学の収集研

究はハーンの内におのずと比較文学的関心が働いた結果だともいえる。しかし日本の詩歌におけるより一般的な花鳥風月のモチーフには見向きもせず、ひたすら虫に焦点をあてたのは、ただ単に虫好きという趣味からではない。

ひとつの理由は、ハーンも「餓鬼」「蠅の話」「安芸之助の夢」に書いているように、仏教の民間信仰で虫が人間の生まれ変わりとされ、また人の靈魂が蠅や蝶の姿をとって彷徨い出るとされていて、虫の姿がハーンの心ひかれる輪廻説を連想させるからである。もっとも、因果を背負った人間はいろいろな獣にも生まれ変わる。むしろそうした仏教説話の方が多い。それなのに他の鳥獣類には関心を示さず、虫にのみハーンの眼が行く最大の理由は、虫がこの世で、少なくとも眼にみえる限りにおいて、最も小さな生き物だからにほかあるまい。その微細な生命に、ハーンの心は吸い込まれていくのである。

### ●ミクロコスモスの神秘

珠玉の短編という言葉がいかにも相応しい「草雲雀」（『骨重』所収）は、ハーンの飼っていた草ひばりの死をめぐるしみじみとした随筆である。ハーンは、鳴く虫のなかでも最も小柄な、まるで蚊のような小さなこの虫の魅力をこう語る。

「いつも日が沈む時分になると彼の極めて小さな魂 (infinitesimal soul of him) が目を覚ます。そうすると部屋の中にえも言われぬ美しさを湛えた繊細で神秘的音楽が広がり始める。極端に小さな電鈴ベルの響きとでもいおうか、細く、かぼそく銀しろねのすずしい音色で震え波立つ調べを響かせる。夕闇が深まるにつれてその音が美しさを増す。

時折その音は盛り上がって家全体が小さな不気味な共鳴で打ち震えるように思われるくらい、——また時折は次第に細くなつて繊細極まる、かすかな声となる。しかし、高いときにも低いときにも、この虫の声は物にしみ透つてゆく異様な音色をもっている。……ひと晩中この微小なもの (atomy thing) はそんな風に歌うのだ。」

ハーンがひと際いとおしんだこの虫は、晩秋のある日、女中が餌をやるのを忘れたため、自らの脚を食べて最後まで歌いながら命尽きた。ハーンは「世の中には歌うためには自分で自分の心臓を食らわなくてはならない人間の姿をしたこおろぎもいるのである」と最後に書き添えてこの随筆を結ぶ。寸暇を惜しみ、体に鞭打つて創作に励んでいたハーンは、草雲雀の運命に自分自身の姿を重ね感嘆した。この一文の魅力がいわば一種の「芸術家の肖像」にあることは、たしかに従来指摘されてきた通りかもしれない。

だが、それ以上に印象に残るのは、草雲雀を繰り返し形容する infinitesimal, atom という言葉だろう。そしてハーンを強くひきつけるのは、草雲雀の歌人としての凄絶な生き方以上に、「大麦の粒の半分」しかないその姿の小ささそのもの、かほど微細な生命の内に自分と同じ感情が存在するという神秘だと思える。

草雲雀は虫売り商人から買ったものだった。陶甕のなかで人工的に孵化されて、野外を知らない。なのに「先祖が夜露にぬれた草むらで鳴いた折」と同じ美しい歌を歌い続ける。それは、その歌が「有機的記憶の歌、——何億何兆とも知れぬ種族の霊の遙かな、おぼろげな記憶が歌わせる歌」だからだとハーンはいう。夜の静けさの中で「過去の土に向かって鳴き、静寂に呼びかけ、神々に呼び掛けて時が戻ってくるようにと求める」草雲雀のそのような歌を聞いていると、「小さな籠にひそむ大霊の一分子と私の中にある大霊の一分子とが共に実在の無量海の深み (the depths of the Vast of being) では常に同じ一つのものである……」と感ずるという。それぞれが悠

久の過去との繋がりの上に存在する、この一点においてハーンは微小な草雲雀に自己同一化するのである。

「草雲雀」の冒頭には「一寸の虫にも五分の魂」という句が掲げられている。キリスト教では人間以外に靈魂の存在を認めない。従ってこの句をハーンの共鳴した汎神論に結びつけることもできようが、その真意はむしろ微細な世界に大宇宙をみいだすことの神秘にあったろう。顕微鏡を覗いた時の驚きにも似た感情である。

ハーンはこれまでも「小さいもの」に共感を寄せてきた。だが、ここではハーンはもはや small, little といった形容詞は用いない。infinitesimal な atom である草雲雀は、「阿弥陀寺の比丘尼」に散りばめられた小さな品々よりずっと遙かに、これ以上小さくなりえないほど微小なのである。

この“infinitesimal soul of him”という言葉には、「極めて小さな魂」という訳語では表現しきれない趣がある。本来は微分解析で「無限小」を指す数学用語であるこの語には、引き込まれるような動きがあるのである。ちょうどヴァイオリンの最弱音がさらにピアニッシモで震えつつ空氣中に消え入るがごとく、また物体が宇宙の彼方に次第に遠ざかって小さな点と化すがごとき、人間の知覚を越えた次元への収斂運動を連想させる。

しかも、その微細な虫の微かな楽音が「時折家全体が小さな不気味な共鳴で打ち震えるように思われるくらい」突如巨大な響きに変わるという。その瞬間、まるで交響曲のカデンツァのような急展開と共に、草雲雀に自己同一化していたハーンの心も微小の極みから無限大へと引き上げられる。“infinitesimal”という語は、単に収斂運動のみならず、このようにミクロの世界からマクロの世界へと突き抜ける、拡散運動への位相転換をも孕むのである。

ところで「草雲雀」のみならず、「露の一滴」(『骨董』)「焼津」(『靈の日本』)「夜光るもの」(『影』)など、これま

ラフカディオ・ハーン——晩年の結実（二）

でハーン晩年の傑作と評されてきた幾つかの随想を見ると、それらの中にこの語が一貫して使われているのに気付く。露の一雫を形容するのも、夜の海に光る微小な夜光虫を形容するのも infinitesimal である。そしてどちらもハーンにとっては「過去世」の思考へと想いを導くものだった。

ハーンの書斎の窓には竹格子がついていた。その格子にかかる朝露に見入れば、水滴の小さな球面は朝の色を映し出している。空の色、野の色、それに遠くの木立の色、小さな一軒家の微小な映像、その入口の前に子供たちが遊んでいるのまでが、逆さに映っている。ひとつのミクロコスモスである。だが、結んでは落ち、落ちては結ぶ水の分子は太古より存在し、「いつとも知れぬ過去の世の空の色や地上の彩り」を映し出してきた。そして地球が減び去った後も止むことはなく、「代替わりした惑星の朝」を映すだろう。その中に時間が連綿と堆積しつつ永遠が内包されているのである。

時空間の奥行きを垣間見させる微粒子の神秘。ハーンの到達した思考の映像詩にはこの微粒子が満ちている。いわば松江時代のハーンの想念を解くキーワードが「子供」であり、熊本時代が「振り子」だったとすれば、晩年を象徴するのが「infinitesimal」に他ならない。そしてその微粒子があやなす幻想的な宇宙像が最も鮮やかに啓示されるのが、焼津の海であった。

●焼津

ハーンは、東京に出て来てから亡くなる一九〇四年の夏まではほとんど毎年、駿河湾に臨む焼津という小さな漁港で夏を過ごしている。九八年の夏、一度鵜沼に行ってみたものの、遠浅の海と人出の多さに懲りた。翌年から

はセツの出産を控えた一九〇三年の夏を除き、必ず夏休みの一カ月は焼津の海辺で過ごすことに決めた。

小さな入江に沿って弧を描くこの静かな漁師の町には避暑客など来ず、人の往来さえまばらだった。入江の向こう側には富士山が端然と聳えている。海は深く荒かった。太平洋の豪快な波が打ち寄せてくるために石垣の防波堤が築いてあり、堤防と海の間細い浜辺は砂ではなく玉砂利に埋め尽くされていた。白っぽいこの荒磯と石垣、風雨に晒された家並み、灰色の瓦屋根。焼津は「日がカッと差すと、くすんだ色合いに不思議な風情が出る町だ」とハーンは書いている。（焼津にて）

ここでの見聞は「漂流」「海のはとり」「乙吉の達磨さん」に記されているほか、焼津の海がいかにハーンにとって重要な想念の場であったか、「焼津にて」「夜光るもの」などの観想的な随筆を通して知ることができる。

町の旅館は性に合わず、魚屋の山口乙吉を紹介されるとその二階がハーンの定宿となる。二階は天井の低い、十畳四畳の続き部屋に十二畳と三畳の部屋だった。匂いと蚤が多いのにはハーンも閉口したが、実直な乙吉の人柄が気に入ったのである。店では魚の他、鰹節、干物、ラムネに草鞋まで売られている。そして一方の壁に神棚があり、その下の小棚に赤い片目の達磨がのっていた。自分も片目のハーンは何となく気になる。「どうして両目とも作ってあげなかったのかね。片方だけではいかにも気の毒じゃないか」。ハーンが乙吉に聞くと、乙吉は「へー」と屈託なく笑顔で答え、良いことがあった時に達磨に目を入れる習慣があることを教えた。ハーンは帰京する際、請求された宿代があまりにも少ないと感じ、倍額払って乙吉を喜ばせる。すると出発の朝、乙吉は達磨さんにも二つの目をしっかり開けてハーンを見送らせた。ハーンはそういう乙吉に心和む。

焼津でハーンは休暇を満喫した。かすりの浴衣姿に草履履き、麦藁帽子をかぶってのんびりと散歩をし、浜辺

ラフカディオ・ハーン——晩年の結実(二)

に佇んで遙かな青い海を眺め、夜は涼み台に集まる近所の人々相手に怪談を語って聞かせたり、難破船の珍しい話などしてもらって過ごした。一雄に英語を教えながら手すさびに水彩のスケッチ画を描き、留守宅の妻には毎日、ただたどしいヘルンさん言葉の日本語で「チイサナ・カワイイ・ママサマ」と始まる絵入りの微笑ましい手紙を書き送っている。そして勿論、毎日必ず泳いだ。日に三度も海に入ることもあり、雨の日でも、そして時には夜も泳いだ。

●夜の海

ハーンは葉巻をくわえたまま、夜の波間に仰向けに漂うのが好きだった。そういう時、乙吉は海岸で提灯を携えて、遙かに点滅するハーンの煙草の火を心配げに見守りながら待っていたという。夜光虫の輝く夜の海の泳ぎがいかに魅惑的か、マクドナルド宛に書いたこと(九九・八)があるが、なかでも印象深い体験となったのは、灯籠流しと共に泳いだことだろう。

精霊流しの行事といえ、小さな船に供物や線香、時には灯籠をのせて流すのが普通である。ところが、焼津では船は用いず、蠟燭を灯した灯籠だけを直接海に流す。ハーンが浜辺にやってきた時は、すでに行事は終わって人々が帰った後だった。ただ灯籠の明かりだけが点々と闇の中を光りながら沖合へ流れている。ハーンはふと灯籠のそばまで行きたくなり、海に飛び込む。ぐんぐん泳いで思ったより早く追いついた。海は静かで一面に夜光虫が美しく光っている。無数の微細な、infinitesimalな生命の光である。その中を五色の色を帯びた灯籠の群れが漂い、流れていく。見上げれば月はなく、満天の星空である。



濃密な一編の散文詩ともいふべき「夜光るもの」には、この異様に美しい幻のような空間に身を浸し、漂うハーンの観想が描かれている。静かな闇の中、見渡す限りの海に火と燃える燐光がさざ波を打ちながら空の果てに接し、その上の虚空には星屑が沸き立ち、幾億千万の恒星の明かりが様々な色で脈々と微光を放つ。そして両者はハーンの視界の中で渾然一体となって同一化される。もはや現実の海はなく、闇に光の微粒子が満ちる全円空間である。そのとき、ハーンは自分も燐光の一点であるのを知った。ハーンの心の動きにつれて閃く色が赤から青、緑、靑色と変わる。まわりの光も様々な色を見せる。ところが、白い色だけが見当たらない。いぶかしむハーンに一つの声が答える。

「白い色は最高位を表すものだ。億兆の光を混ぜてそれはつくられる。お前の役目はそれが燃えさかるのを手伝うことにある。……お前の活動はほんの一瞬のもの。しかし、お前の脈動する光はいきつづける。お前は物を思うことで、思いの色が輝く瞬間に、おおけなくも神々をつくる者の一人になるのだ」（「夜光るもの」）

形而上的なこの言葉をもってハーンの観想は究極に達し、閉じられる。幾億の多彩な色の微粒子の融合によって造られる「白」という色は、まさにハーンの意識が、海面にきらめく微細な光の点に同化しつつ収縮し、次いで一気に広大無辺の宇宙空間へと引き上げられる、無限小から無限大へのダイナミックな転換運動のカタルシスそのものといえる。

ハーンはしばし瞑想に浸っていたが、ふと我に帰ると不安を覚えた。精霊が海を渡る時に泳ぐのは危険だという古い迷信を思い出したハーンは灯籠の火に向かって南無阿弥陀仏を唱え、急いで浜の方へ泳いで帰った。

翌日は嵐だった。盆を過ぎる頃、海は決まって荒れる。夜、ハーンは眠れない。打ち上げては砕け散る大海の

うねりが体を包むような気がする。そしてまんじりともせずに激しい濤声に耳をすましていると、いつしか子供の頃、海の音に聞き入っていた時の不思議な気持が思い出されてきた。その後の人生の様々な場面で出会った、世界の各地の海の光景と波の音も次々と脳裏をよぎっていき、ハーンは草雲雀の歌を聞いたように怒濤の声に耳を傾ける。いつしか海の声は心の中に壮大な交響曲と化して響き渡っていた。

ハーンは、人生は神々の音楽だという言葉思い出す。この世の喜怒哀楽の声は立ち昇って神々の耳に届くころには完全に調和のとれた美しい天上の音楽となっている。

「ある意味では私たち自身が神々のようなものである」とハーンは悟る。なぜなら、「数限り無い過去の生者しょうじやたちの痛みと喜びの総和」が妙なる音楽のハーモニーとメロディーとなって私達の回りに行き交うからだ。そして丁度それと同じように、私たちが生きた喜びと悲しみは、百万年も後にもっと豊かな音楽となって他の人々の心に入ってゆくだろう、とハーンは思う。

「人生には、今までただ臆気にわかつていた真理が忽然として明確な性質を帯びてくる、というような時があるものだ。先頃駿河の海岸にいたときの私がそうだった。……私はそれまで自分でも分からずにいた自分の魂という不思議なものを、初めて悟りえたような心持がした。自分の魂は過去の世の様々な物のなかに生きてきたのだ、また自分の魂は未来の生存物の目を通して、この太陽を見るに違いないということを、その時悟ったような気がした。」（餓鬼『骨董』）

ハーンは焼津の海で啓示を得たと言う。「自分が過去の世の様々な物のなかに生きてきた」ことの自覚がアイデンティティの確認であるとすれば、「未来の生存物の目で同じ太陽を見るに違いない」という信念こそ究極的

な救いとなる。この「啓示」を視覚的に映像化したのが燐光輝く夜の海の遊泳の体験をもとにした「夜光るもの」であり、聴覚的な幻想で捉えたのが嵐の夜の海の音楽を論じた「焼津にて」の最終段であった。

#### ●微粒子のダイナミズム

ハーン晩年の世界観のエッセンスとはこの様に、いわば微小の極みから広大な無限の果てへ、過去の最奥から未来の彼方へ突き抜ける、それこそ輪廻の輪をめぐり、メビウスの輪をめぐって一気に位相転換する、この運動の力強いダイナミズムにこそあるといえる。それは時間と空間の両イメージが相互浸透し、壮大な宇宙の生成流転のリズムが躍動する豊穡な精神世界なのである。

そしてそれが読む者の心を打つのは、ハーンの人生の軌跡のダイナミズムそのものがそこにこめられているからだ。それは幼年期の特殊な体験から出発し、数十年の間その記憶と戦い、自己の由来と世界の意味を問うてきたハーンの人生の結論であり、その最終的な世界像、微粒子への収縮と原過去への遡及による、この幻想的な蘇生のヴィジョンにこそ、日本文化の物理的な「小ささ」への着目に発し、幼年期との連想を経て、極限の微粒子へと次第に収斂し、かつアイルランドの少年時代、ギリシャの幼年期から更に過去世へと時を遡及してきた、ハーンの日本体験そのものが結実しているからである。

#### 四 最後の夢

#### ●チェンバレンとの訣別

上京後、ハーンはチェンバレンとの交際を絶った。あれほど親密だった文通も実質的には神戸時代、最後の論争をした九五年の暮れを以て終わりを告げており、以後数回の事務的な短信を交わしただけである。

もっともこの時どちらかが絶縁状を叩きつけたわけではなかった。ハーンは晩年まで家族にチェンバレンのことを敬意を以て語り、チェンバレンの方も一九〇四年のハーンの死に際しては遺族に丁寧な心配りを示した事が知られる。しかし同じ東京に住みながら交流はない。根本的な世界観を異にすることがわかった今、もはや語りあうことは何もなくなっていたのである。そして一九三五（昭和十）年、八十五歳まで生き延びたチェンバレンは『日本事物誌』第六版つまり最終版（一九三九年刊）に新たに「ラフカディオ・ハーン」という伝記的項目を設け、次のごとくハーンを評した。

「最初の数年間、彼の日本に対する情熱は熱病的なほどだった。……ただ残念なことに、ラフカディオは現実の認識を欠いていた。というよりも、細部ははっきり見えるのだが、それらを一つの全体として把握することができなかった。それは精神にとどまらず、肉体においても同様だった。片目は全く見えず、もう一方の目も、ひどい近視だった。……彼は唯の一度も、地平線や天の星を正しく見なかった。彼の一生は夢の連続で、それは悪夢に終わった。彼は情熱のおもむくままに日本に帰化して小泉八雲と名乗った。しかし彼は夢から覚めると、間違ったことをしたと悟った。……」

かなり露骨な悪意に満ちたこの部分は第二次世界大戦で日本への反感が高まると、日本賛美者ハーンの実体を暴いた文として有名になる。時にはハーンの作品を抜きにこの文章だけが一人歩きし、最近にいたるまでの欧米でのハーンの過少評価の根源でもあった。しかしハーンの晩年の作品世界を熟味すれば、その一生も日本滞在も

決して悪夢に終わったのではないことは明らかである。

● 祖国回帰の出来ない人々

チェンバレンは、ほとんど外国で育ちながら、終生英国人であることに誇りを持ち、日本研究に一度は没入しながら最終的に祖国に回帰した。そういう彼には、ハーンが最終的に到達した境地も、世界像も、そこに至る苦渋のドラマも把握できなかっただろう。チェンバレンはその揺るがぬ空間的アイデンティティをもってこそ、世界を地理的力関係に還元しえたのだった。

だが、ハーンはその幼児体験からしてイギリスとギリシャの間で宙吊りになったごとく地理的安定を欠き、意識的に父なる欧米世界に背を向けるという空間的緊張関係をもって己のアイデンティティのバランスを維持してきた人だった。その張り詰めた緊張空間が日本において破綻した。異国に自己同一化できず、西洋への回帰も果たせず、再び根源的な欠落感を露呈した自己の空白を埋め得たのが、内的時間逆行だったのである。そしてそのような個人的な救いが照射して独特の世界像を生み出した。

両者の相反する世界像は、いわば異文化体験の異なる帰結を示す。異文化体験というものに段階をつけるとすれば、その第一段階が異文化への憧れ、理解と共感であり、第二段階が異文化への反発と祖国文化への回帰ということになろう。大概の人間はこのいずれかの段階に止まり、そしてそれは本人にとっても幸せかつ安心な帰結といえる。だが、その更に先の段階に進まざるを得なかったのがハーンだった。

ハーンの辿った異文化体験の軌跡は決してありふれたものではない。生い立ち、資質、才能、時代、日本とい

う場、様々な偶然の条件が重なって編み出された、まさに一篇のドラマといえる。

だが、ひとり、外的条件は一致しないものの、同じく異文化体験の第三段階に到り、似通った世界像に到達した人間がいる。民芸運動の創始者、柳宗悦である。『白樺』の一員として西洋の芸術思想を紹介していた柳は、いわば一種の西洋離れとして李朝白磁論を著した。だがそのために、それまでの日本観、ひいては世界観が崩れてしまうことになる。現在では常識ながら当時は未だ一般的ではなかった認識、つまり、例えば奈良や京都の文化財はみな朝鮮渡来のものであるとの認識をえた時、もはや、柳は祖国回帰する場を奪われ、日本人としてのアイデンティティを喪失したも同然だった。

西洋文明との乖離に悩み、かつ日本回帰も果たせないその柳の見出した活路、救いとして展開されたのが民芸論だった。柳が民芸の美の最大要件として挙げるのは、無名の無数の工人の手によって同じ品が作られてきたこと、およびそれぞれの地方において昔からずっと繰り返して生産されてきたことの二点、つまり、当人の熟練、また地方の伝統という二重の「時間」の蓄積である。無名の陶工が無心にろくろを回す手を、一個人の手ではなく、類代の祖先の手であると述べた『雑器の美』（昭和二年）冒頭の文章はよく知られているが、それはどこことなくハーンの「有機的記憶」の説を連想させる。柳にとって各「地方」とは文化の空間的力関係とは無縁の場なのであり、そういう各々固有の伝統をもつ小さな「地方民芸」が無数に点在して日本ひいては世界が構成されると考えつつ、日本国中の民芸品を限なく調査発掘して回ったのだった。

ハーンと柳の最終的世界像はかくも類似している。それは影響関係というより、同様の祖国回帰不能の結果、必然的に到った思想的帰結と考えるべきだろう。ハーンの怪談が日本の民話を題材にしつつも、日本でも西洋で

もない不思議な空間を形成しているがごとく、柳の収集した民芸品もまた、それぞれ個性的な地方色に彩られるべき品々が、みなどこか相似た風貌を持っている。柳の思想を最も忠実に具現したとされる浜田庄司の作品に端的に表われているように、柳の民芸の真髄は抽象化された想念としての土臭さ、地方性にあるのである。そこに、民芸運動が各地域個別の生産活動から離れ、一つの民芸「様式」に終わる必然性がある。

ハーンと柳は、物事の表層を突き抜けて形而上的思考に浸り、大衆の生活に密着した民話や民芸品とは二人にとって、他者の無意識の領域に参入することで未来へと自らの想念を伝達する場、手段としてこそ意味を持った。そして両者の晩年の著述に共通する、ある透徹した響きは、いわば祖国や異国なる実際の土地を遊離し、抽象的な時間の遡行という精神作用のうちに自らを昇華しつつ、西欧的近代を超克しようとした者の緊迫感に他ならない。

### ●美しいシャボン玉

東大辞職後のハーンは、西大久保の家に籠もってひたすらペンを走らせた。ハーン留任を求める学生の騒ぎに驚いた井上學長は、時間と俸給を半減して契約更新したいと申し出たが、自尊心を傷つけられたハーンは断った。一方アメリカのコーネル大学で日本文化について連続講演をする話もあったが、それも学内にチフスが発生したために中止になった。亡くなる前、「活字を組む音がカチカチ聞こえる」と最後まで刊行を心待ちにしたという『日本——一つの解釈』（一九〇四）はその講演のために用意した原稿をまとめたものである。

一九〇四年の春から早稲田大学で週四時間の英文学講義を持つようになるが、それ以外は、西日の射し込む書

齋で想像の世界に浸っていた。窓から夕日を眺め、一服する時は、座蒲団の上に行儀よく座って、楽しそうに体を前後にゆるくゆりながら、煙管をふかした。前述したように、ハーンは終生「もの」への関心が薄かった。だが、ハーンが生涯にただ一つ愛着を持って収集した「もの」、それは煙管である。かつて、浮世絵に描かれ、ロティやチェンバレンに日本文化の「小ささ」の象徴と見なされた、この小さく優雅な喫煙用具には、エキゾチスムに始まり、松江から熊本、神戸をへて日本への陶醉と幻滅、自国への回帰の失敗から日本対西洋の二元論を超越した自らの軌跡への思いが象徴的にこめられていたのかもしれない。この頃までには、ハーンの煙管のコレクションは百本ほどにもなっていた。ひとつひとつ彫刻があり、浦島、秋の夜の砧、茄子、鬼の念仏、枯れ枝に鳥、詩、茶道具、昆虫などが特に気に入っていた。手廻りの品々には、好きな虫の模様のあるものばかりを置いた。封筒には蜘蛛の巣の透かし模様があり、コーヒー茶碗、ペン皿、文鎮、根つけ類も虫か蛙の装飾がついていた。机の上には大きな法螺貝があり、煙草の火がなくなると、これを吹いて知らせる約束になっていた。太く良い音の響きを喜び、ハーンは面白がって何度も吹いたという。

ハーンは四人の子供の父親になっていた。一八九七年の二月に次男が生まれ、大山巖にちなんで名付けられた。巖は後、稲垣の姓を継ぐ。九九年の十二月に誕生した三男の清はハーンの絵画の才を受け継ぎ、後にフォビズムの画家として知られるようになる。そして一九〇三年の九月、末っ子の寿々子が生まれた。

長男だけは地元の学校に上げず、ハーンが直接勉強を見ていた。時間割りを組み、朝と午後と一時間ずつ、徹底的に英語を仕込んだ。英語を教え出したきっかけは焼津で一雄が学生に英語でからかわれたためといわれ、ハーンは日本人離れした一雄の風貌と自分に残された寿命への不安の念にかられて、一雄の勉学が思うように捗



らない時には神経質なほど厳しく叱責して、再来日していた友人のマクドナルドにたしなめられたこともあったらしい。一雄が悔し涙を流すとハーンは「何ぼう惨いの父と思うない下され」と思わず小声で洩らしたという。それ以外の点では、優しい父だった。ただ子供たちの眼にも、ハーンの浸る世界の異様な緊迫感は垣間見えていた。

ハーンは時々夜、子供たちに怪談を語ってきかせたという。てにをはの外れた簡単なへるんさん言葉にもかかわらず、その意味は誰にもよく通じ、「夕闇迫るころなど、大きな目鼻の父の表情が何となく恐ろしく、その顔色さえ蒼白に見えて、『怖い、もう止めてッ!』と思わず叫ぶこともあった」と一雄は回想している。『父「八雲」を憶ふ』

ハーンがペンを取る時は、高い机で眼を原稿用紙にすりつけんばかりにして、一心不乱の勢いで一枚一枚と書き進めていった。こういう時に呼び掛けても分からなかった。ある時は、夜中、廊下がひどい油煙の臭いに満ちていたので、セツが急いでハーンの部屋に入ると、ランプの芯が出過ぎていて、室内が黒い煙で暗くなっていたのに、ハーンはまるで気がつかないで書いていたこともあった。夕食の時は、いつも、子供たちが「パパ、カムダウン、サッパ・イズ・レディ」と声を揃えて呼ぶと、「オールライト、スウィートボーイズ」と嬉しそうに返事して出てくるのが習わしだった。だが一生懸命の時はいつまでも出てこなかった。しびれをきらしてセツが呼びにゆくと、きょとんとして「私食事しませんでしたか。済みましたと思う。おかしいですね」と答えたり、食事中も普段のように快活に話をせずに、コーヒーに塩を入れたりして、ぼんやりするので、みなで何度か「パパさん、もう夢からさめて下され」と頼んだという。

ラファディオ・ハーン——晩年の結実（二）

ハーンは執筆中の雑音に対して神経質な面があった。だから、その創作の邪魔をしないようにと、セツはいつも戸の開け閉めから廊下の足音、子供の騒ぎなど一切耳に入れぬよう、また部屋に行くにも煙草をのんで煙管をコンコンと音をさせている時とか歌を歌って室内を歩いている時を選ぶなど、気をつかっていた。

「西大久保に移りましてから、家も広くなりまして、書齋が玄関や子供の部屋から離れたから、いつでもコトリと音もしない静かな世界にして置きました。それでも簞笥を開ける音で、私の考え壊しました、などと申しますから、引き出し一つ開けるにも、そうっと静かに音のしないようにしていました。こんな時には私はいつもあの美しいシャボン玉をこわさぬようにと思いました。そう思うから叱られても腹も立ちませんでした。」

（『思い出の記』）

ハーンの脳裏に浮かぶ様々な作品の想念を「美しいシャボン玉」にたとえるセツの言葉に、ハーンの夢の世界の実現を限りなくいとおしむ優しさがかげえる。陽に映えて虹色に輝きながら、遙かな空の彼方へ風のまにまに飛翔していく、そんな儚く繊細なシャボン玉が壊れぬよう、セツはそおと温かく守ってあげたいと思ったのだ。こういう妻と晩年を過ごすことのできたハーンは幸せだったはずである。

●小さな瓶、小さな寺

ハーンが亡くなったのは、一九〇四（明治三七）年九月二十六日のことだった。五十四才、狭心症だった。その一週間前の十九日、急に心臓に痛みを覚え、医者呼んだことがあった。その時痛みはすぐに収まったものの、「魂をつめて仕事をしすぎるからです、休んで下さい」とセツの言うのも聞かず、ハーンは万が一の時は家族の

力になってくれるよう、知人の法学者梅謙次郎博士にあてて手紙を書く。そして言った。

「この痛みも、もう大きいので、参りますならば、多分私、死にましょう。そのあとで私にますとも、泣く、決していけません。小さい瓶買いましょう。三銭あるいは四銭位のです。私の骨入れるために。そして田舎の淋しい小寺に埋めて下さい。悲しむ、私喜ぶないです。あなた、子供とカルタして遊んで下さい。如何に私それを喜ぶ、私死にましたの知らせ、要りません。もし人が尋ねましたら、はああれば先頃なくなりました。それでよいです」(『思ひ出の記』)

セツが、そのような悲しい話をして下さるな、と哀願すると、ハーンは「これは心からの話、真面目のことです」と力をこめて答え、小さな声で「仕方がない」と安心したように言い添えたという。小さな寺の小さな骨壺に葬ってくれと言ったハーンはこの時、初めて日本の寺を見た時の感動を、不思議に明るい陽の射し込む境内で屈託のない子供たちが楽しそうに遊んでいる光景を思い浮かべていたのかもしれない。

セツは、思い返せばハーンの死を予感させるような出来事がいくつかあったと『思ひ出の記』に述べている。

亡くなる数日前に、日頃ハーンのお愛でていた桜の木の一枝が一日だけ返り咲いた。飼っていた松虫の声が次第に枯れてくるのを、「だんだん寒くなってきました。知っていますか、知っていませんか、すぐに死なねばならぬという事を。気の毒ですね、可哀相な虫」とぼつりと言ひ、暖かな日に草むらに放してやろうとセツと約束したという。だが、最も心ひくのは、亡くなる日の朝ハーンが見たという、遠い旅の夢の話ではないだろうか。

ハーンは人生においても、文学においても、夢がもっとも大切なものだと考えた。ハーンという夢とは、睡眠中に見る夢のことも、また現実を離れた空想と幻想の世界のことも指していた。

ハーンは「作家への言葉」と題したある日の講義で、学生達にこう述べている。

「もし諸君が優れた想像力を具えているなら、靈感を得るために書物に頼ることは止めたほうがよい。それよりも、自分自身の夢の生活に頼るのだ。それを注意深く研究し、そこから靈感を引き出すのだ。単なる日常の体験を越えたものを扱う文学において、ほとんどすべての美しいものの最大の源泉は夢なのだから」

家でもハーンは子供たちが床につく前に、「グッドナイト、プレゼント、ドリーム」「ザ、セーム、トゥ、ユウ」または日本語で「よき夢見ましょう」と挨拶しあい、ハーンとセツはいつも互いにその前の晩みた夢の話をしたという。

九月二十六日の朝、セツが六時半頃書斎に行くと、ハーンは既に起きていて、煙管をふかしていた。ふだんから家族より早く目覚めても、セツや子供の「夢を破る、いけません」と言って静かに書斎で座って煙草をのみながらセツが来るのを待つのを常としていたのである。この日、セツが「お早うございます」と声をかけてもしばらく黙っていた。それから「昨夜、大層珍しい夢を見ました」と言う。「どんな夢でしたか」と尋ねると、「大層遠い、遠い旅をしました。今ここにこうして煙草をふかしています。旅をしたのが本当ですか、夢の世の中」「西洋でもない、日本でもない、珍しいところでした」と答え、一人静かに興じていたという。ハーンの魂は死を前に、自らの想念の到達した境地を映像化したような夢幻の世界にふと彷徨いでたのではないか。「西洋でもない、日本でもない」、ただ様々な光を放つ幾億千万の微粒子が渾然とひとつ白い総体として存在する広大な、そして荒涼とした宇宙の一片の塵と化しつつきらきらと天の河辺に消え入ったかのように。

その晩、いつもと変わりなく上機嫌で夕食をすませたハーンは一時間ほどするとセツの側に淋しそうな顔をし

てきて、囁くように「ママさん、先日の病氣また参りました」と言った。そしてセツに支えられて静かに床に横たわると、口元に微かな笑みを湛えてまもなくこの世を去った。仏式の葬儀が瘤寺で執り行われ、雑司ヶ谷墓地に葬られた。